

中世アジアの皮革 3. 日本

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

1. はじめに

日本の古代における皮革および革製品の製造は主に朝廷内の職能集団によって行われていた。この人たちの先祖は百済と高麗からの帰化人である。鎌倉時代には朝廷の権威が衰え、幕府の権勢が高まり、それに伴い革工（職人）が諸国の守護大名の下で武器や馬具等を製造した。応仁の乱（1467～77）以降、戦乱の時代となり、兵器の需要がますます高まった。武将は装飾を施した鎧や兜を身に付けたが、それにはいろいろな染革や紋様のある画革（絵革）が使用された。

2. 皮革製造

鎌倉・室町時代における皮革の製造に関する文献は見当たらない。しかし製造技術は平安時代から江戸時代に至るまで大きくは変化していないと両時代の文献から考えられる。平安時代の「延喜式」（967年施行）によれば、牛皮は脱毛して日光に晒し、踏みほぐし、鹿皮は脳を擦り付けて揉み乾かし、さらに燻し、馬皮は油を振りかけ踏み揉んで鞣した^{1, 2)}。鎌倉時代の絵巻物「粉河寺縁起」の獵師の家の場面には、裏打ちした皮を木の枠に結いつけて張り、日に乾燥している図がある。この皮は茶色の地に白斑点があるので、鹿毛皮である。また「天狗草紙」の京四条河原の場面には、脱毛した皮を地面に杭で張り、乾燥している図が

ある。これは現在の仕上げの「張り乾燥」工程に相当する。革を杭で張った光景は戦前まで姫路の市川の河原で見られた。江戸時代の「貞丈雑記」によれば、鎧に用いた練革（いためがわとも言う）の製法は膠を薄く煎じて冷やしてから、牛生皮を浸して芯まで水が浸透した後に、金槌で3日間打ち固めてから、石灰を両面に塗り、日に乾かして造り、革を厚くするには、革2、3枚重ねて打つと將軍家お抱えの鎧工が伝えている³⁾。まれに生皮を火で温めて打って造ることもある。貞丈は冬寒中に作れば、革が丈夫で虫が生じないが、夏だと乾かないうちに腐り弱くなり虫が生ずると述べている。さらに乾燥するときウナギの肉を擦り付けたり、ウナギを焼いて煙にふすべすることを推奨している。江戸中期の図説百科事典「和漢三才図会」には、革を柔らかくすることをなめす（奈女須）というところ⁴⁾。稲藁の灰汁に米糠を混ぜて、少し温めてから、この液で革の表裏をよく揉み洗い、これを竹ぐしで張って晒し、やや乾くのを待って竹籠で肌肉（皮下組織）を取る。甲革は牛皮を臘月（陰暦の12月）に泥水に浸し、晒し乾かし、漆を塗って硬くするところある。鹿革の製造について「止戈枢要」に記してある⁵⁾。剥いだ皮を一夜水に漬けてから、竹に掛け、銚刀と包丁で肉片を除去し、糠を入れた水に1、2日漬けて脱毛し、さらに糠1升到塩3、4合加え、それを両

面に塗り、乾燥し、篋^{へら}掛けし揉む。湯で洗い乾燥する。揉み皮に「やわら」を引けば色よく白くなり柔らかくなる。やわらは鹿の脳味噌の腐ったものである。なお平安時代の「延喜式」では、馬の脳味噌が使用されていた。

染革は鹿の白革^{しらかわ}（韋）を植物で染めたものであり、古代より製造されていた。南北朝時代の足利義満は壮麗な甲冑や鞍馬を好み、播磨^{なめしかわ}の革工と工人に熟皮を用いてそれらを作らせた⁶⁾。義満は地を紫に染め、唐草や菊、紅葉等の模様を白くした錦革を他人が使用することを禁じた。しかし錦革といえども紫色でなければ使用を許し、黒や赤の地のものを御免革^{ごめん}と称した。また小桜や菖蒲^{しだ}、齒朶^{こもん}、菱等の花葉の紋様を染めた細文革は平安中期から製造されていたが、室町前期に山城（京都）八幡^{やわた}の神人が余暇に菖蒲を染めた革を菖蒲革と称した。この「しょうぶ」の音は勝武や尚武^{かねなが}と合い、甲冑や武具に使用された。征西将軍懐良が肥後（熊本）八代の革工に模板を刻して、猿、獅子、牡丹、唐草、梅鉢等の紋様と「正平六年六月一日」の8文字を染めさせた。これを正平革と呼んだ。これは聖武天皇の天平時代の不動尊の像と八幡の2文字の画革に「天平十二年八月」の文字のある天平革をまねたものである。両者の年月の数字はその後も改められなかった。獅子の周囲を牡丹の花と葉で埋めた紋様の藻獅子革が鎌倉末期から室町時代にかけて多量に製造された。肥前（佐賀）や筑前・筑後（福岡）も革工が多くいた。画革はすでに「延喜式」に大宰府の貢納物として記載されており、平安時代初期にはすでに製造されていた。その後の中世において盛んとなり、江戸時代にも続いた。16世紀頃（室町時代）に外国から上質の革が輸入されており、江戸中期の「装剣奇賞」^{こわたり}に古渡^{なかわたり}（または中渡）

野牛^{やぎゅういん}印度亜、中渡水牛皮、モウル^{るそん}、呂宋革、古渡（または中渡、新渡^{しんと}）聖多黙^{さんどめ}等が示されている⁷⁾。これらの名称から野牛や水牛の皮が輸入されていたことが分かる。印度亜（応帝亜）とモウルは天竺すなわち印度を指し、古渡りは室町あるいはそれ以前を指し、それ以降を中渡、新渡と称した。新渡の語は室町末期の「日葡辞書」にもあるので、室町後期から江戸中期を指すと思われる。舶来品を総じて印伝革と称した。これらの革を模した革や鉄印で紋様を打ち出した革が国内で製造された。紋野牛や七宝印度亜、紋聖多黙等がある。今日の甲州印伝革は鹿革を漆仕上げしたものであるが、彩色技法がインドから伝来したことに由来する。

3. 革製品

日本における甲冑の推移変遷は平安前期までの古代、室町時代までの中世、江戸時代の近世におおまかに分けられる。古墳時代の甲冑には鉄板金^{てついたがね}やそれを短冊形に裁断した小札^{こざね}を使用していたが、780年に「甲冑は皆よろしく革を用いるべし」と勅命が出され、以後革甲が作られた。「延喜式」には、短甲冑^{けいこう}や挂甲の素材として、牛や馬、鹿の革が記されている^{1, 2)}。平安中期頃から大型の大鎧が騎射戦に有効なので普及し、南北朝時代になると、源平合戦の頃の一騎懸けから集団の大規模な戦闘に発展し、それにより重厚な大鎧は簡略化した軽便な銅丸と腹巻に変化した（図1、2）⁸⁾。応仁の乱により武具の需要が拡大し、歩兵は簡略な具足を、武将は個性豊かな甲冑を身に付けた。室町末期には鉄砲の伝来があり、鉄製鎧が増加した。

工芸性の高い甲冑が今日なお数多く保存されている。巖島神社の「小桜韋黄返威鎧」（国宝 平安時代）は黒漆塗革小札を黄に

返した藍染の小桜韋で威してあり（本誌 No. 157）、春日大社の「赤糸威大鎧」（国宝 鎌倉時代）は黒漆塗の鉄と革の小札一枚交ぜとして赤糸で威してあり、長谷寺（奈良）の祭礼に使用した「赤糸威鎧」（重文 室町時代）は鉄札と革札の一枚交ぜであり、弦走と金具廻、革所を包んだ色彩の美しい萌黄地蜀江錦は明の渡来品である（図1）。伊予（愛媛）の大山祇神社や河内（大阪）の金剛寺には重要文化財の胴丸や腹巻が多数保存されている。金剛寺の「熏草包腹巻」（重文 室町時代）は熏草（燻した鹿革）で胴部分を包んである（図2）。

鞍は古くは革製であったが、中国から木製の鞍が古墳時代に輸入され、その後日本でも作られた。正倉院の奈良時代の鞍は木製の鞍橋に鹿革の鞍褥、牛革やアザラシ皮の鞆、鹿革で縁取りをした麻布などの屨脊が取り付けられている⁹⁾。平安時代の鞆には豹や虎、鹿の毛皮が使用された。鎌倉幕府の年代記である「吾妻鏡」では、源頼朝が入京の際（建久元年11月）の装束に、夏毛の行膝・染羽の野矢・水豹毛の泥障とあ

る¹⁰⁾。夏毛は鹿毛皮であり、染羽は鶯の尾羽である。その年の1月の頼朝の後白河法皇への献上物に、鶯の羽1櫃がある。この鶯の羽は奥州から届いたものを贈ったとある。平泉の毛越寺本尊を造立する際の、仏師運慶への支払いに金や馬、布帛の他に鶯の羽100尻と水豹の皮60枚が含まれている（文治5年9月）。鶯（オオワシ、オジロワシ）の羽や水豹の皮は蝦夷が島（北海道）の産物である。「延喜式」には熊の障泥が記されており²⁾、北海道の産物は古くから陸奥国を通じて都にもたらされていた。「吾妻鏡」に、黒塗りの張革鞍（鞍橋全体を黒漆塗りの革で包んだ鞍）が錢別の一つとしてすでに記されている（建久2年11月）。また、南北朝後期から室町初期の作と推測される「庭訓往来」にも、鶯・鷹羽の矢、黒漆張鞍、豹・麁皮の鞍覆、虎・鹿子皮の切付（鞆の一種）、水豹・熊皮の泥障、野宿料雨皮・敷皮等が記されている¹¹⁾。ドイツの皮革博物館には、白革を金装飾した鞍



図1 赤糸威鎧（室町時代 長谷寺蔵）



図2 熏草包腹巻（室町時代 金剛寺蔵）

褥、鞆および鞍覆くらおおいが装着された16、7世紀の日本製鞍が幾つか収蔵されている。馬甲も元々は防御用であったが、戦国時代には装飾ないし威厳の目的で毛皮が使用された。江戸時代に入ると、鞍橋の前後輪を練革十数枚重ねて成形あるいは木地に数枚の革を貼り付けた鞍や鞍橋全体を革で包んだ鞍が製作された。

弓矢を入れて携帯する容器に、上代の矢筒式ゆきの鞆ころくと矢立式えびらの胡祿うつぼ、中世の箆へらと空穂くわなどがあり、矢を入れる箱ほうだて（方立）や束ねる紐、それを背負う帯に毛皮や革も使用された。箆の方立の外う面に猪や熊の毛皮が用いられ、空穂の矢羽を保護する穂ほに被せた毛皮は主に猪皮や鹿皮であった。

狩猟や騎射は武士の重要な軍事訓練でもあり、その時に、両足を保護するために穿いた行膝ゆきは古くは布帛製であったが、平安時代以降は毛皮が使用され、初めは熊皮が、後に鹿皮が一般的に使用された。また太刀の鞘を保護する尻鞆しりたもとに、虎・豹・熊・鹿等の毛皮が使用された。鎌倉時代には、放生会等の法会には平安時代から行われていた流鑄馬やぶさめや蹴鞠けまりがしばしば催された。流鑄馬りゅうちうばの装束は狩装束と同じ様式で、行膝ゆき・物射ものい沓くつ・空穂かりえびら（または狩箆）であり、これらには毛皮や革が用いられている。物射沓は馬上沓ばうかの一種の半靴たてあげであり、牛革製で立拳部に鹿の錦革や白革を用いた。鹿や猪の毛皮製のものもある。武士が用いた貫つらぬきの沓は熊、牛、猪、鹿等の毛皮を巾着状いぶしまりにした浅沓である。蹴鞠は鹿革の白鞠しろまりや熏鞠かものくつを爪先が鴨の嘴に似た漆塗り革製の鴨沓かものくつで蹴った。「延喜式」では、牛皮は履料となっており、また正倉院の履が牛革に漆を塗しとうずってあるので、この鴨沓も牛革であろう。なお襪はき（沓下）は通常布帛であるが、熏、紫、藍等の色革も用いられた。「吾妻鏡」では、中納言忠信が紫革の使用を勅許されたとある

（建保2年2月）。京都の時代祭りのやぶさめ列（鎌倉時代）に、鹿毛皮の行膝ゆきを穿いた武士や虎毛皮の尻鞆しりたもとをはめた太刀を持つ武士がいた（図3 筆者2004年検分）。法会における導師や僧への布施として、色革があるが、これは鹿の染革である。色革は後白河法皇への献上物や上京する者への餞別、相撲参加者への禄物にもなっている。

絵巻「法然上人絵伝」には、法然や検非違使が革沓くつをはいていたことや聖が鹿皮を身につけている（鹿皮聖と称していた）ことなどが描かれている。庶民の間でも鹿皮を小袖の上などに着る風習があった。

装束の一つである革帯は正倉院にあり、長さが153センチと長く、それに四角い巡じゆん方ぼうや丸い丸鞆まるともが取り付けてある。阿須賀神社（熊野）には室町時代の作とされる石帯いしのおびがある。これは牛革とみられ、全体に黒漆が塗ってある。「和漢三才図会」には、玉石は紀州、雲州、越州および佐渡より出ずるとある⁴⁾。足利義満が1396年に武人の礼式を定め、革足袋を履くようにした⁶⁾。後に庶民も履いた。天正年間（1573～91）には、京や近畿地方で、熊、猪および鹿の毛皮を張付けた毛皮草履がはやった。江戸



図3 行膝をはいた武士（京都時代祭）

時代に入って牛皮を草履の裏に貼った雪駄が一般的に使用された。

雅楽は5～6世紀に中国や朝鮮から伝来した舞楽が日本古来のものと融合し、平安時代に宮廷や社寺で荘厳な音楽として栄え、鎌倉時代の武家政権のもとでも続いた。応仁の乱で壊滅的な打撃を得たが、大社寺では法会や神事に際して演じられていた。雅楽には皮を用いた琵琶や太鼓、鼓が使用された。火焰の装飾枠を施した大太鼓は皮面の径が2メートルほどであり、楽太鼓(鈞太鼓)と胴の部分が少し膨らんだ鞆鼓の径はそれぞれ50センチと25センチほどであり、牛皮が使用されている。歩きながらあるいは立って演奏する荷太鼓の径は80センチほどである。なお春日大社の大太鼓(重文 鎌倉時代)と荷太鼓の径はそれぞれ210センチと97センチである。鎌倉時代の絵巻「天狗草子」の醍醐寺の桜会や講堂前の田楽の場面には、大太鼓や荷太鼓が描かれ、平安後期の歴史物語「栄華物語」取材とした「駒競行幸絵図」(鎌倉時代)には、船楽の大太鼓や荷太鼓、阮咸(琵琶の類)が描かれている(図4)¹²⁾。中世の神社の境内では芸能集団が祭礼などで民衆を対象に田楽の類を演じていた。能の成立は室町時代と言われるが、それに用いる大鼓と小鼓は馬革、能太鼓(締太鼓)は牛

革を用いる。日蓮宗の僧が用いる団扇太鼓も牛革である。鎌倉時代に朝廷が近江の日吉神社造営にともない太鼓を作らせていた⁶⁾。「和漢三才図会」には、「大鼓は厚い牛皮を用い枹でたたく。摂州(大阪)天王寺のもの径八尺」とある⁴⁾。舞楽の際に用いた地久兜や鳥兜ならびに背に付ける迦陵頻(極楽にいるという想像上の鳥)羽根や胡蝶羽根が法隆寺に収蔵されている。これらは鎌倉時代の作で、牛革を彩色してある。なお、仏堂を飾る荘厳具の唐招提寺や東寺の牛皮華蔓は奈良や平安の時代の作であるが、法隆寺や峰定寺(京都)のものは鎌倉時代の作である。

4. まとめ

鎌倉・室町時代は武士社会であり、武具や馬具の需要が高まった。甲冑は実用性ばかりでなく、権勢を示すために画章を用いた装飾性のあるものもあり、工芸品として今日まで保存されている。中国や東南アジア、インドからの舶来品が珍重され、それを模した革が国内で製造された。中国の「三才図会」に倣った「和漢三才図会」は日本の皮革製品を多く示している。絵巻物などに当時の甲冑や楽器等の革製品が描かれている。



図4 駒競行幸絵巻(鎌倉時代 久保惣太郎蔵)

文 献

- 1) 藤原忠平等：延喜式，新訂増補国史大系 2部 8 - 10冊，国史大系刊行会編 吉川弘文館 (1961) P. 425, 590, 989.
- 2) 竹之内一昭：延喜式から読み取れる古代の皮革，皮革科学，54, 111 (2008) .
- 3) 伊勢貞丈：貞丈雜記，新訂増補故実叢書 16, 故実叢書編集部編，明治図書出版 (1952) P. 560.
- 4) 寺島良安：和漢三才図会，日本庶民生活史料集成 28, 三一書房 (1980) P. 348, 371, 435, 453, 558.
- 5) 大関増業編著 下島正憲校訂：止戈枢要，器械做法 9, 書物展望社 (1946) P. 5.
- 6) 黒川真頼：工芸志料，増補訂正，宮内省博物館 (1888) P. 107.
- 7) 稲葉通龍新右衛門：装剣奇賞，6, 阪府書籍老舗 (1781) P. 1.
- 8) 尾崎元春：甲冑，日本の美術 21, 13版，小学館 (1978) P. 44, 51, 181.
- 9) 出口公長 竹之内一昭 奥村章 小澤正実：皮革製宝物材質調査，正倉院紀要 28, 1 (2006).
- 10) 不明 吾味文彦 本郷和人編：吾妻鏡，5, 吉川弘文館 (2009) P. 2, 48.
- 11) 不明 石川松太郎校注：庭訓往来，東洋文庫 242, 平凡社 (1973) P. 156.
- 12) 秋山光和：原色日本の美 8, 絵巻物，16版，小学館 (1977) 図 63, 100.